河南町文化財調査報告書第３集

須江関ノ入遺跡詳細分布調査Ⅱ

昭和63年度

平成元年３月

河南町教育委員会

須江関ノ入遺跡

序

景観の勝れた県立公園旭山をはじめ、西部と北部は比較的なだらかな山並が連なり、東は、最高所60米程の須江丘陵が横たわる。そして、中心部は、かつての広淵沼が広大な沃野となり南に開ける。このような自然の豊さは、私達町民の誇りである。

須江丘陵は、かつてその東側を北上川が、西側を玉造川（現江合川）が川筋を変えながら流れ、ここに住み着いた人々に、時代を超えて、豊かな生活の糧を与えてきたところである。

縄文時代の狩猟採集の場になり、米作りが始まってからの弥生から現代に至るまでの人々の生き様が土地に刻みつけられ、あるいは記録として、私達に伝えられている。

この須江丘陵は、石巻近郊に当たるところから、民間の開発によるスプロール化が年々激しくなってきている。開発から自然や遺跡を護り、調和のとれた生活環境を整備することは、現代の私達に与えられた責務である。とりわけ、遺跡について、その範囲と性格を把握し、その保存を図る必要がある。

そこで、昭和62年度と昭和63年度の２ヵ年にわたり、国庫補助金の交付を得て、遺跡の詳細分布調査を実施することになった。

広大な面積の詳細分布調査ではあったが、調査を可能ならしめたのは、宮城県教育庁文化財保護課ほか関係諸機関並びに地元の方々の並々ならぬ御協力の賜物であった。埋蔵文化財の保存と開発関係との調整は、今後も重要な課題であるが、今回の詳細分布調査をとおして学ぶべき点が沢山あった。

調査に御協力いただいた方々に深甚の謝意を表すとともに、この報告書が社会教育の資料として活用されることを心から願うものである。

平成元年３月

河南町教育委員会

教育長　浅野鐵雄

目　次

序

Ⅰ　調査に至る経過……2

Ⅱ　遺跡の位置と環境……4

Ⅲ　調査の方法と経過……8

Ⅳ　基本層位……9

1．B区…9　2．C区…9　3．D区…10

Ⅴ　発見された遺構と遺物……11

1．B区…11　2．C区…12　3．D区…12

Ⅵ　まとめ……16

〔引用・参考文献〕

■図版目次

第1図　周辺の遺跡……3

第2図　調査範囲……6

第3図　D区基本層位断面図……10

第4図　D区NC・ND-536地点
層位断面図……10

第5図　B区検出遺構……11

第6図　D区古銭拓影……12

第7図　D区検出遺構……13

第8図　C区・D区出土遺物(土器)……14

第9図　C区・D区出土遺物(石器)……15

第10図　B区遺構配置図……26

第11図　C区(北区)遺構配置図……28

第12図　C区(南区)トレンチ図……29

第13図　D区遺構配置図……30

■写真目次

①B区調査前全景……20

②C区調査前全景……20

③D区3号窯跡・灰原確認面……20

④B区1号住居跡確認面……21

⑤B区SK－1検出状況……21

⑥B区6号焼土遺構検出状況……21

⑦B区7号焼土遺構検出状況……21

⑧D区2号焼土遺構検出状況……22

⑨D区3号焼土遺構検出状況……22

⑩D区6号焼土遺構検出状況……22

⑪C区・D区出土遺物(土器)……23

⑫C区・D区出土遺物(石器)……24

例　　言

1．本書は、昭和63年度国庫補助事業として実施した関ノ入地区の詳細分布調査の内容を収録した報告書である。

2．本事業は河南町教育委員会が担当し、宮城県教育庁文化財保護課の協力を仰いだ。

3．土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1987）を利用した。

4．本書を作成するに当り、整理・執筆・編集は、主事中野裕平が担当した。

5．報告書の作成において、下記の方々・機関から助言・協力を賜った。

宮城県教育庁文化財保護課、平沢英二郎（広渕小学校教頭）、三宅宗議（石巻高等学校教諭）、高倉敏明（多賀城市埋蔵文化財調査センター）、渡辺泰伸（仙台育英学園高等学校教諭）、佐藤敏幸（瀬峰町教育委員会）

6．遺構略号は下記のとおりである。

ＳＩ－竪穴住居跡・竪穴状遺構　ＳＫ－土壙

7．調査・整理に関する諸記録及び出土遺物は、河南町教育委員会が保管している。

調　査　要　項

遺 跡 の 名 称：関ノ入遺跡

遺 跡 所 在 地：宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入・茄子川ほか

調　査　主　体：河南町教育委員会

調　　査　　員：河南町教育委員会社会教育課　主事　中野裕平

調　査　指　導：宮城県教育庁文化財保護課　技術主査　手塚均、技術主査　佐藤則之、技師　赤沢靖章、技師　加藤明弘、技師　菅原弘樹、技師　近藤和夫

調査・整理協力：宮城県教育庁文化財保護課

（調査参加者）伊藤ゆう子、亀山信子、今野はな子、佐藤公雄、佐藤定、佐藤次雄、高橋吉雄、橋浦たき子、橋浦千代枝、橋浦安雄（以上整理も含む）

調 査 事 務 局：河南町教育委員会社会教育課

調　査　期　間：昭和63年５月10日～昭和63年12月10日

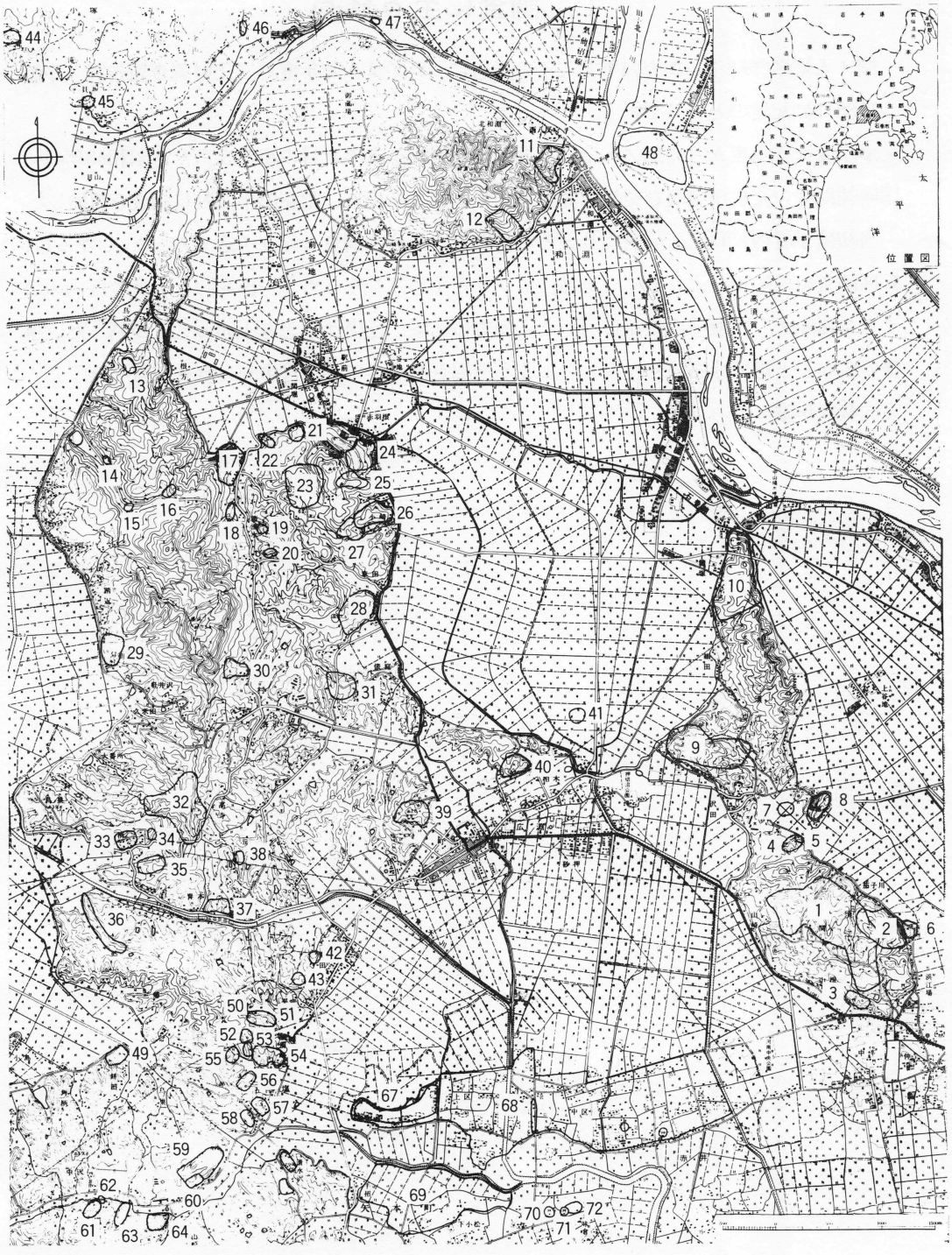
調査対象面積：58,298㎡（発掘面積　35,049㎡）

Ⅰ．調査に至る経過

関ノ入地区詳細分布調査の事業着手の経過については、昨年度の文化財調査報告書（中野：1988）に記述のとおりである。

本年度は昨年度からの関ノ入地区詳細分布調査の第二年次目の事業に当り、昭和63年4月、国庫補助金の交付申請及び発掘調査の通知の手続きを行い、昭和63年５月に調査を開始した。

当初は年度内にＤ区、Ｃ区、Ｂ区とＡ区の北西部分の調査を行う予定であった。しかるに、Ｃ区調査の段階で、より多くの遺構の広がりが予想されたため、一部を除き、調査区内の表土を全面除去し、遺構の確認に努めた。調査の結果、遺構は予想を下回ることが判った。遺構の広がりと遺構分布の密度のおおよそが把握されたので、12月中旬に野外調査を終了し、室内整理作業に入った。



第1図　周辺の遺跡

Ⅱ．遺跡の位置と環境

遺　跡　地　名　表

No.	遺　跡　名	時　代
	河　南　町	
1	関ノ入遺跡	縄文・奈良・平安
2	長者館跡（長者平遺跡）	中世
3	宿屋敷跡	中世
4	代官山遺跡	奈良・平安
5	代官山横穴古墳群	古墳・古代
7	池袋囲遺跡	——
8	塩野田館跡（塩煮田城）	中世
9	須江瓦山窯跡A	平安
10	須江糠塚遺跡	縄文(中)・古墳(前)・奈良・平安・中世
11	要害館跡（館山館）	中世
12	武田館跡（武田屋敷）	中世・近世
13	高森山遺跡	古墳・奈良・平安
14	大沢A遺跡	縄文・奈良・平安
15	大沢C遺跡	奈良・平安
16	大沢B遺跡	縄文
17	小友遺跡	奈良・平安
18	箱清水寺脇遺跡	縄文
19	箱清水A遺跡	縄文(後)
20	箱清水B遺跡	縄文・奈良・平安
21	黒沢A遺跡	縄文・奈良・平安
22	黒沢B遺跡	縄文・古代
23	宝ヶ峯遺跡	縄文(中～晩)
24	前山遺跡	縄文・奈良・平安
25	大田沢遺跡	縄文・奈良・平安
26	小崎館跡	近世
27	小崎遺跡	縄文・奈良・平安
28	草田館跡	——
29	朝日貝塚	縄文(中)
30	喜多村館跡（高地谷館）	中世
31	俵庭遺跡	縄文(中・後)・奈良・平安
32	新庄館跡（駒立館）	中世
33	桑柄貝塚	縄文(前)
34	桑柄遺跡	奈良・平安
35	青木館跡（林光館）	中世
36	矢返遺跡	古墳・古代
37	駒場館跡	——
38	奈良山遺跡	古代・江戸
39	夷田館跡	近世
40	柏木館跡	近世
41	広渕沼遺跡	——
42	新田A遺跡	古代
33	新田B遺跡	古代
	石　巻　市	
6	新山崎遺跡	古代
	涌　谷　町	
44	中野遺跡	古墳(後)・奈良・平安
45	貝坂貝塚	縄文(前・中)
46	笠石貝塚	縄文(前・中)
47	御蔵場貝塚	縄文(前)
	桃　生　町	
48	神取山遺跡(揖取山城)	中世
	矢　本　町	
49	餅田貝塚	縄文(前)
50	平田原貝塚	縄文(前・後)
51	加武喜遺跡	中世？
52	国見台遺跡	奈良・平安
53	国見沢遺跡	奈良・平安
54	前峰遺跡	奈良・平安
55	国見沢A遺跡	古代
56	国見沢B遺跡	古代
57	浜江場遺跡	縄文・奈良・平安・中世
58	五台遺跡	縄文(早・前)
59	樋ノ口遺跡	中世
60	一杯清水遺跡	奈良・平安
61	隆泉寺跡	中世・近世
62	中沢上遺跡	古代
63	僧坊跡	中世
64	鈴ヶ原館跡	中世
65	清水沢遺跡	古墳(後)・奈良・平安
66	清水沢B遺跡	古代
67	東照井遺跡	古墳(後)
68	赤井遺跡	弥生・奈良・平安
69	小松遺跡	縄文・弥生・古代
70	二入館	中世
71	五十鈴神社古墳	古墳
72	小脇浦遺跡	古墳(後)・奈良・平安

関ノ入地区は、宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入及び茄子川地内に所在し、ＪＲ石巻線佳景山駅の南方約3.5kmにある。遺跡の所在する河南町は宮城県の東部に位置し、石巻市の北西に隣接する。旧北上川は町の北部で江合川と合流して石巻湾に注いでおり、その南側の平坦地となだらかな丘陵地が町域を形成している。

東に標高60～65mの通称須江丘陵、西に篦岳丘陵から続く標高70～170mの通称旭山丘陵、北に最高所173mの和渕山とこれに連なる丘陵を配している。町の中央部には低坦地があり、

江戸時代には用水確保のため広渕沼が造られたが、大正10年から昭和３年にかけて干拓され水田地帯となっている。

須江丘陵は、小竹地区を挟んで大きく南北に二分される。調査対象区域は、丘陵南部のほぼ中央の頂部及び斜面に立地しており、頂部の標高は60～65m である。現況の大部分は杉や雑木の山林で、他に僅かの畑地がある。

本遺跡の周囲にも多数の遺跡が発見されている。須江丘陵の北端にある須江糠塚遺跡は、縄文時代中期から古墳時代前期、奈良・平安時代、中世に至る複合遺跡であり（高橋守克、阿部恵：1987)、須江瓦山窯跡Ａには大規模な窯跡群がある。また、代官山や茄子川には横穴の存在が確認されている。(註１)

さらに周辺部に目を移すと次のようになる。

町内には旧石器時代の遺跡の発見は知られていない。

縄文時代の遺跡としては、縄文後期の土器型式「宝ヶ峯式」の標式遺跡として、学史的にも著名な宝ヶ峯遺跡がある（伊東信雄：1957、松本彦七郎：1919－ａ、1919－ｂ)。他に朝日貝塚、桑柄貝塚、小崎遺跡、俵庭遺跡などがあり、これらは旭山丘陵とその麓部で平坦地と接する縁辺にある。

弥生時代の遺跡としては本鹿又遺跡、古墳時代の遺跡としては須江糠塚遺跡、高森山遺跡がある。また、新田Ａ遺跡では古式土師器を出土している。(註２)

奈良・平安時代の遺跡としては前述の須江糠塚遺跡、須江瓦山窯跡Ａのほか、代官山遺跡、高森山遺跡、俵庭遺跡などがある。

中世以降には、旭山や須江の丘陵上などに多くの城館が築造され（館数14)、本遺跡の周辺では金売吉次の仮屋敷跡（藩政期には小島嘉右ェ門の除屋敷跡と言われる）とされる長者館跡があり、須藤勘解由左衛門が館主とされる糠塚館跡（須江糠塚遺跡）や塩野田城（館）跡がある。

註 (1). 石巻高等学校教諭三宅宗議氏の御教示による。

(2). 広渕小学校教頭平沢英二郎氏の御教示による。なお、遺物は町教委が保管している。

第2図　調査範囲

Ⅲ．調査の方法と経過

今回の詳細分布調査は、関ノ入地区開発区域内に、『宮城県遺跡地図』登載の周知の遺跡である関ノ入遺跡が所在するため、遺跡の立地している丘陵頂部及び斜面を対象に行ったものである。

地区設定：新しい区名を設けず、昨年度調査を行ったＣ区・Ｄ区の拡張という扱いのもとで、Ｃ区の北側及び南側をＣ区、Ｄ区の西側をＤ区の区域内に入れ、それぞれをＣ区、Ｄ区と名付けた。また、Ａ区とＤ区の間をＢ区と名付けた。国家座標Ｘ＝＋36.0、Ｙ＝－170.0を原点とし、調査区域全体に30mごとの基準杭と３ｍ単位のグリッドを設定した。グリッド表記は、東西方向をアルファベットで、南北方向をアラビア数字で表わし、両者を組み合わせて呼ぶことにした。したがって、基準杭Ａの南東グリッドの名称は0Ａ－500である。

調査方法：事前の踏査により、Ｄ区ＮＰ－544で遺構の一部が確認され、Ｄ区ＮＱ－544、ＮＩ～Ｌ－528～30、ＮＲ－486地点で遺物が表面採取された。これらの地点を中心に関連遺構の有無を明らかにし、遺跡の範囲、性格を明らかにすることを目的として調査を行った。調査範囲が広範に亘り、且つ現況が杉、雑木の山林である所が多いため、効率的に調査を進める上で、表土除去には重機を用いた。

調査の経過：詳細分布調査は、昭和63年５月10日から開始した。Ｄ区、Ｃ区、Ｂ区の順で行った。

①Ｂ区（対象面積：18,918㎡　発掘面積：13,426㎡）

調査区の現況を見た上で、削平を受けているであろう水田・採草地については、トレンチ法によって表土を除去し、他は全面の表土を除去したのち、調査グリッドを設定するための杭打ちを行い、調査を開始した。頂部からは土壙（第１～第５号）、焼土遺構（第２・第9号）、東側斜面からは焼土遺構（第５～第７号）、南側斜面からは住居跡（第１～第３号）、焼土遺構（第１・第３・第４・第８号）が発見された。

②Ｃ区（対象面積：11,841㎡　発掘面積：7,662㎡）

ここでは昨年度の調査区の南北を拡張したので２地点に分けられる。調査は南側から開始した。調査グリッド設定のための杭打ちを行った後、トレンチ法によって表土を除去した。土師器・須恵器の破片の散布はみられたものの、遺構は発見されなかった。次に北側に調査グリッド設定のための杭打ちを行い、トレンチ法によって表土を除去した。この時点で住居跡（第３・第４号）、土壙（第43～第54号）、焼土遺構（第２～第４号）を発見した。この段階でより多くの遺構の広がりが予想されたため、遺構の確認されている斜面の全面の表土除去を行い、その結果、住居跡（第５～第９号）、土壙（第55～第57号）、焼土遺構(第5号～第12号)

を発見した。

③D区（対象面積：27,539㎡　発掘面積：13,961㎡）

調査グリッドを設定するための杭打ちを行ったのち、調査区の南側からトレンチ法で表土除去を行った。この時点で住居跡（第１・第２号）、窯跡（第１～第５号）、焼土遺構（第２～第11号）が発見された。このあとC区と同様の理由により、遺構の確認されている斜面のほぼ全面の表土除去を行い、その結果、住居跡（第３・第４号）、窯跡（第６・第７号）、焼土遺構（第12～第21号）、合口甕棺１基、溝１条を発見した。

工　程　表

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
器材運搬	↔									
地区設定	D区 ↔				C区 ↔		B区 ↔			
表土排土	←	D区	→		←	C区	D区	B区 →		
遺構検出		← D	区 →							
実測・写真		← D	区 →			C区 ↔	D区 ↔	B区 ↔		
遺物整理								←	→	
図面写真整理								←	→	
報告書の作成									←	→

Ⅳ. 基　本　層　位

1．B区

10ＹＲ4/4褐色のシルトの単層で、調査区全体に分布する。厚さは5～15cmで、C区・D区にみられる褐色土よりも多少ぱさぱさしている。また、家屋の東西はいずれも削平を受けているが、西側にある水田の南の一画10m ほどは盛土となっており、最も厚い所で253 cm盛られていた。

2．C区

北側の調査区は10ＹＲ4/4褐色のシルトの単層で、調査区全体に分布する。厚さは10～50cmで、５～50mmの礫を含む。B区・D区にみられる褐色土よりも多少ぼそぼそしている。東側では10ＹＲ3/4暗褐色のシルトを斑状に含むところがある。

南側の調査区は10ＹＲ5/4にぶい黄褐色のシルトの単層で、調査区全体に分布する。厚さ10～35cmで、色調は多少異なるものの、B区の褐色土に似ている。

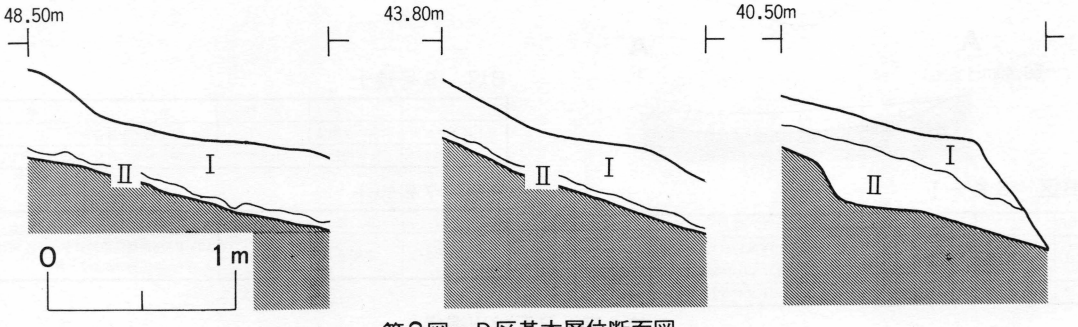
3．D区

調査区が広範囲に亘るため部分的に異なっているが、基本的には2層に分けられる。

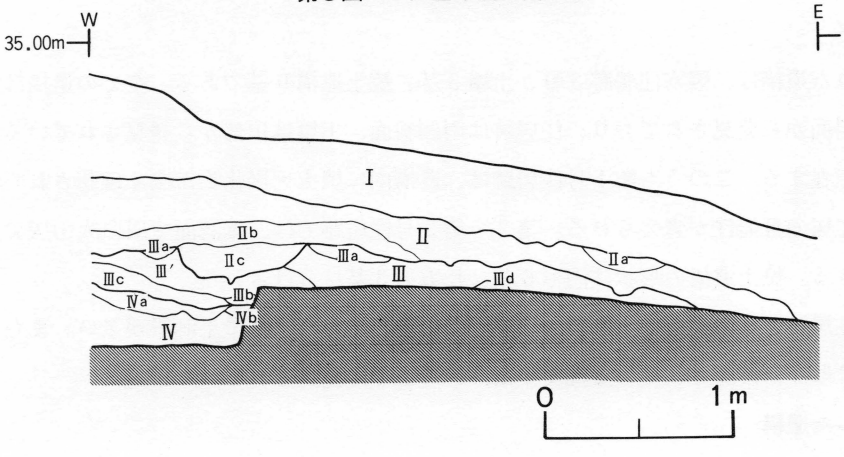
〔第Ⅰ層〕　10YR4/4褐色のシルトである。調査区全体に分布する層で、厚さ20～30cmで、5～30mmの礫を含む。520ライン以南では10YR3/3暗褐色のシルト、10YR5/6黄褐色のシルトを斑状に含んでいる。

〔第Ⅱ層〕　10YR5/4にぶい黄褐色のシルトである。調査区の南側（524ライン以南）に分布する層で、厚さ5～30cmである。石器は全て本層上面から出土している。また、本層下部には5～50mmの礫を多く含んでいる。

また、ND・NE－536地点の土層も参考として載せた。



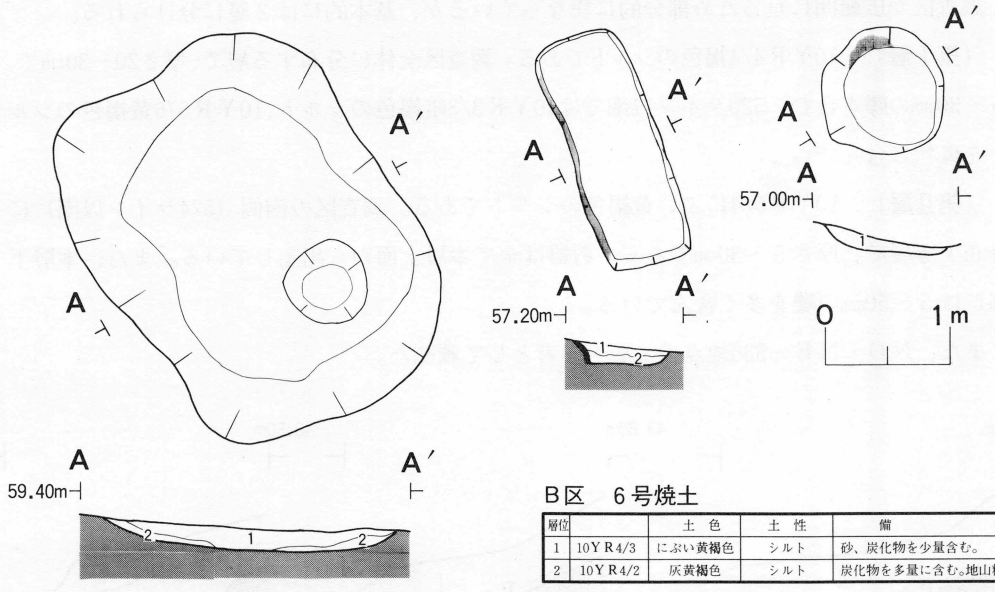
第3図　D区基本層位断面図



層位		土　色	土　性	備　　考
Ⅰ	10YR　5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	細砂を含む。
Ⅱa1	10YR　5/6	黄褐色	シルト質粘土	
Ⅱ	7.5YR5/6	明褐色	シルト質粘土	10YR5/4にぶい黄褐色の粘土質シルトを塊状に、2.5Y7/2灰黄色の粘土粒を斑状に含む。
Ⅱb	7.5YR5/6	明褐色	シルト質粘土	2.5Y7/2灰黄色の粘土粒、7.5YR5/6明褐色のシルト質粘土を斑状に含む。
Ⅱc	7.5YR5/6	明褐色	シルト質粘土	2.5Y7/2灰黄色の粘土粒、5YR5/8明赤褐色のシルト質粘土を斑状に含む。下部にマンガン粒を含む。
Ⅲa	7.5YR5/6	明褐色	シルト質粘土	7.5YR6/8橙色の粘土粒を含む
Ⅲ	5YR　5/8	明赤褐色	シルト質粘土	7.5YR5/6明褐色のシルト質粘土を塊状に含む。
Ⅲ′	5YR5/8	明赤褐色	シルト質粘土	10YR6/6明黄褐色のシルト質粘土、2.5Y7/2灰黄色の粘土を斑状又は粒状に含む。下部にマンガン粒が沈着している。
Ⅲb	2.5Y　7/2	灰黄色	シルト質粘土	7.5YR5/6明褐色のシルト質粘土を含む。
Ⅲc	5YR5/8	明赤褐色	シルト質粘土	2.5Y7/2灰黄色のシルト質粘土を塊状に含む。マンガン粒が下部に沈着している。
Ⅲd	7.5YR5/6	明褐色	粘　土	2.5Y7/2灰黄色のシルト質粘土を粒状に含む。
Ⅳa	7.5YR5/8	明褐色	シルト質粘土	2.5Y7/2灰黄色のシルト質粘土との混合層。
Ⅳb	2.5　7/2	灰黄色	シルト質粘土	7.5YR5/6明褐色のシルト質粘土を含む。
Ⅴ	2.5　7/2	灰黄色	粘　土	7.5YR5/6明褐色のシルト質粘土を縞状に含む。

第4図　D区ND・NE-536地点断面図

V．発見された遺構と遺物



B区　SK－1

層位		土　色	土　性	備　　考
1	10YR3/3	暗褐色	シルト	10YR5/4にぶい黄褐色のシルトを下部に含む。細砂を含む。炭代物を少量含む。
2	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	10YR4/4褐色のシルトを粒状に含む。

B区　6号焼土

層位		土　色	土　性	備　　考
1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	砂、炭化物を少量含む。
2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	炭化物を多量に含む。地山粒を含む。

B区　7号焼土

層位		土　色	土　性	備　　考
1	10YR2/3	黒褐色	シルト	10YR5/6黄褐色の砂質シルトを斑状に含む。炭化物、地山粒を含む。

第5図　B区検出遺構

1．B区

発見された遺構は、竪穴住居跡3軒、土壙5基、焼土遺構9基である。全ての遺構は、頂部と南側斜面から発見されており、住居跡は南側斜面、土壙は頂部から発見されている。焼土遺構は点在する。このうち第1号住居跡は、遺構内に焼土・炭化物が広く確認されており、火災焼失住居の可能性が考えられる。第2・第3号住居跡では、確認面で灰白火山灰の堆積を確認できる。焼土遺構の形状は円形6基、長方形3基に分けられる。

遺物は住居跡とその周辺で土師器・須恵器が出土しており、特に土師器が多い。また、他の地区では散布が確認されている縄文土器は、ここでは発見されていない。

○検出した遺構

(1)SK－1（確認地点　MM・MN－487・8）

平面形はやや歪んだ長方形で、長軸311cm、短軸233cm、深さ15cmの規模である。底面の一画に径65cm、深さ11cmの規模の落ち込みがあるが、他はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

(2)第6号焼土遺構（確認地点　ND・NE－473・4）

平面形は長方形で、長軸192cm、短軸73cm、深さ14cmの規模である。底面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。西側の壁面が暗赤色に焼けている。

(3)第７号焼土遺構（確認地点　ＮＥ－460）

平面形はやや歪んだ円形で、径95cm、深さ10cmの規模である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。北側の壁面の一部がにぶい赤褐色に焼けている。

２．Ｃ区

昨年度の調査区の北側及び南側（以下「北区」、「南区」）を拡張して調査を行った。

(1)北区

発見された遺構は、竪穴住居跡７軒、土壙15基、焼土遺構11基である。住居跡は標高30m前後の平坦地から確認されており、そのすぐ北側には土取りによる崖がある。北区の南端を流れる沢の近くでは、径10～20cmほどの礫を多く含んだ土壙がみられる。焼土遺構は地区西側に点在し、多くは円形で径１ｍほどの規模である。

遺物は底部ヘラ切りの土師器・須恵器が大半を占め、住居跡とその周辺に出土している。他に石器・縄文土器片・中世陶器片が各１点ずつ出土している。

(2)南区

土師器・須恵器の破片の散布は認められるものの、遺構は発見されなかった。

３．Ｄ区

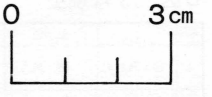
発見された遺構は、竪穴住居跡４軒、窯跡７基、焼土遺構20基、合口甕棺１基、溝１条である。このうち旧沢跡を境にして、北側には第３号窯跡を中心とした遺構のまとまりがみられ、４軒の住居跡は全てこの中に含まれる。他の遺構は点在している。灰原の確認されている窯跡は第１・第３・第４号の３基であり、中でも第３号窯跡の灰原は規模が大きく、170㎡は超えるものと思われる。また、第２・第７号窯跡は、他の５基とは形状及び出土遺物に差異がみられる。焼土遺構の形状は、円形14基、長方形４基、溝状２基に分けられる。合口甕棺は土師器製（ロクロ使用）で長胴形を呈し、高崎（石川他：1987）よりも一回り小さい。

遺物は窯跡とその周辺で多量の須恵器を出土している。殊に第３号窯跡とその周辺では顕著であり、回転糸切りの坏が多い。土師器の出土は少ないが、その中で第２号住居跡、第２号窯跡とその近くでは比較的多く出土している。他に石器15点、縄文中期の土器片１点、古銭１枚が出土している。石器は狩猟用の道具が多く、大半が480～530ラインにかけての東側斜面で出土している。古銭は寛永通寶（古寛永、初鋳年1637年）である。

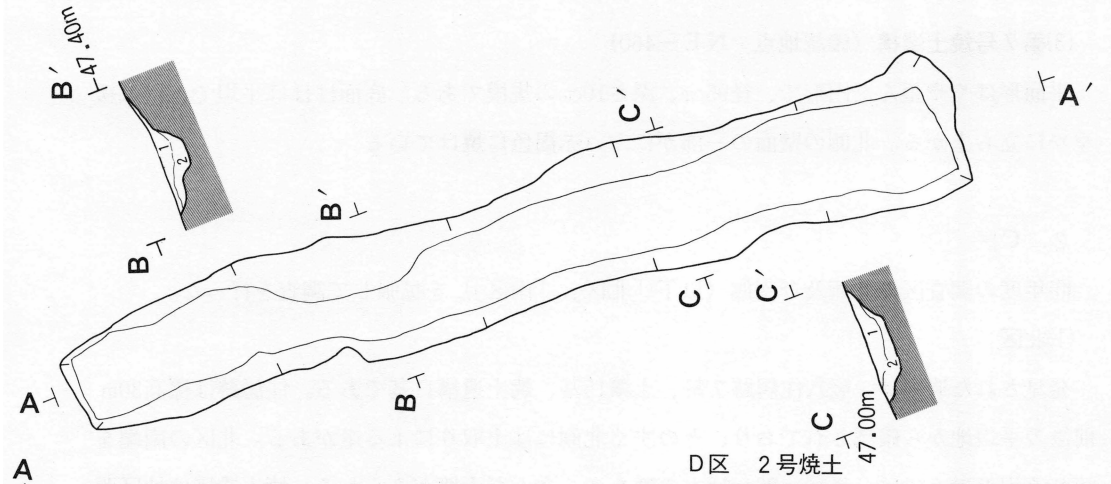
○検出された遺構

(1)第２号焼土遺構（確認地点　ＮＩ・ＮＪ・ＮＫ－495･6）

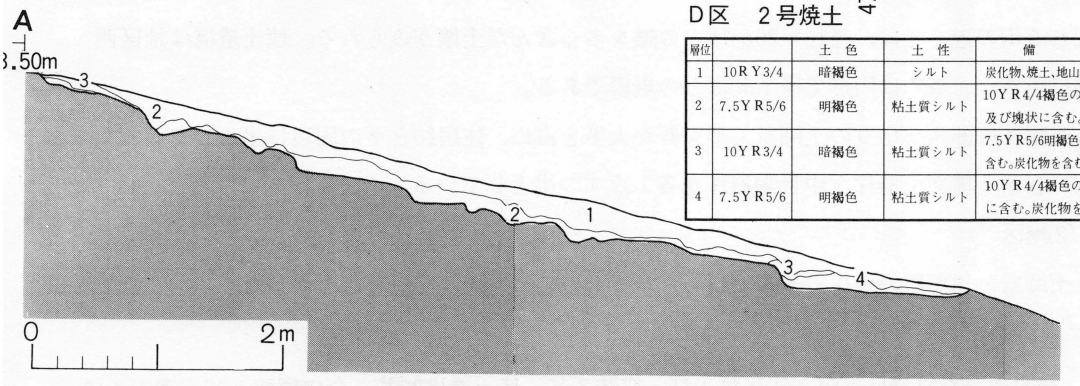
平面形は溝状で、長軸744cm、短軸104cm、深さ35cmの規模である。１～４層に炭化物、３層に焼土塊を含んでいるが焼け面はなく、これらのものは流れ込みによるものと思われる。



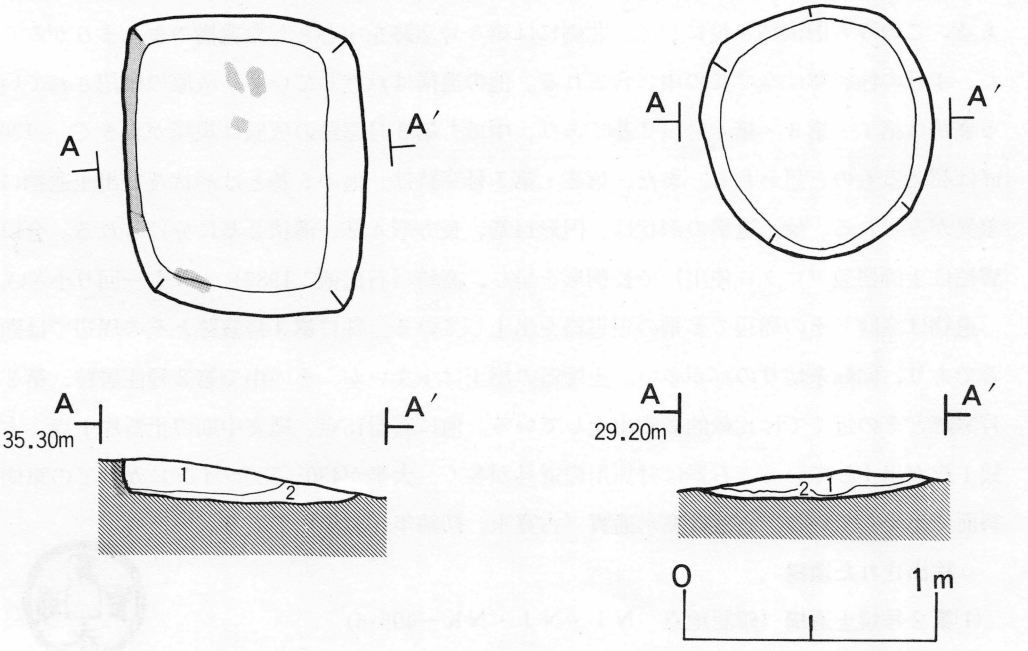
第６図 Ｄ区　古銭拓影



D区　2号焼土



層位		土　色	土　性	備　　考
1	10R Y3/4	暗褐色	シルト	炭化物、焼土、地山粒、礫(5～30㎜)を含む。
2	7.5Y R5/6	明褐色	粘土質シルト	10Y R4/4褐色の粘土質シルトを斑状及び塊状に含む。炭化物を含む。
3	10Y R3/4	暗褐色	粘土質シルト	7.5Y R5/6明褐色の粘土質シルトを粒状に含む。炭化物を含む。焼土塊を含む。
4	7.5Y R5/6	明褐色	粘土質シルト	10Y R4/4褐色の粘土質シルトを斑状に含む。炭化物を含む。



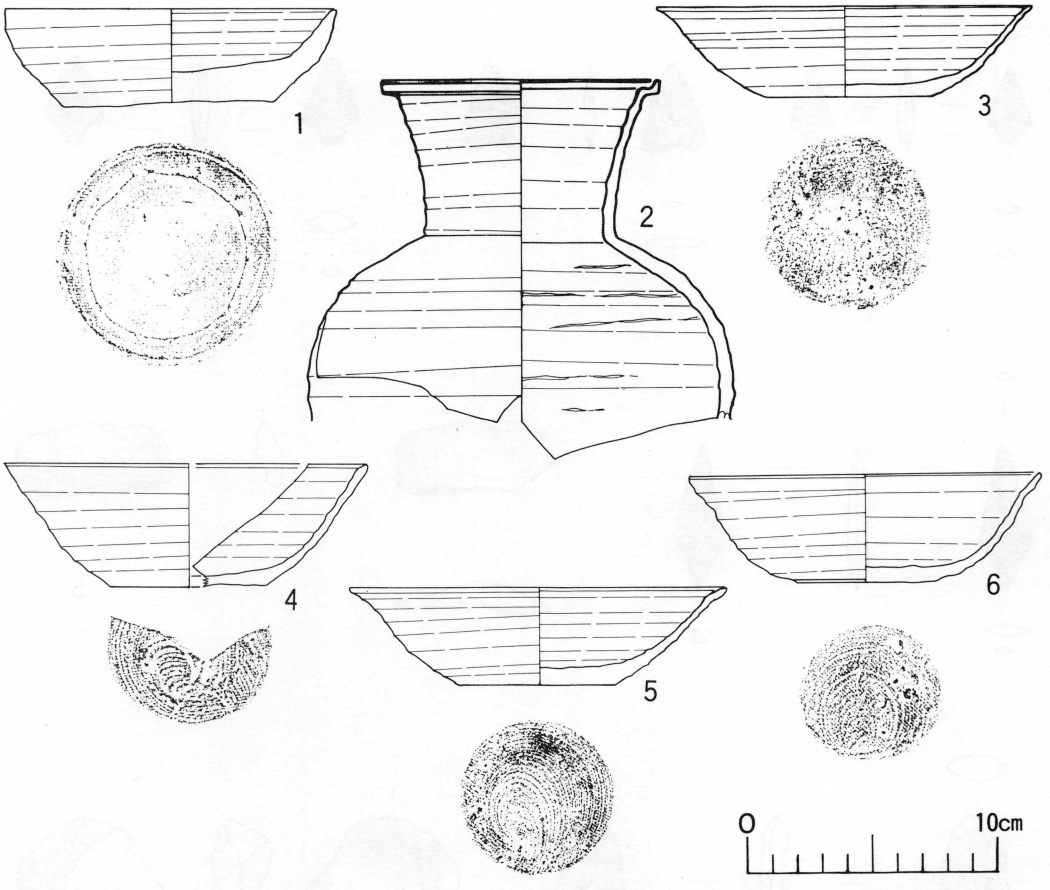
D区　3号焼土

層位		土　色	土　性	備　　考
1	10Y R4/4	褐　色	シルト	10Y R5/6黄褐色のシルトを塊状に含む。炭化物を含む。
2	10Y R3/1	黒褐色	粘土質シルト	10Y R5/6黄褐色のシルトを塊状に含む。炭化物、焼土粒を含む。

D区　6号焼土

層位		土　色	土　性	備　　考
1	10Y R4/3	にぶい黄褐色	シルト	炭化物を粒状に、10Y R5/6黄褐色のシルトを塊状に含む。
2	N　1.5/	黒　色	シルト	炭化物層。焼土粒を含む。

第7図　D区検出遺構



土　器　観　察　表

	種類・器形	出　土　地　点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調　　整		
1	須恵器・高台付坏	C区・S I-8　確認面	13.3	8.4	3.8	外面：ロクロナデ	内面：ロクロナデ	底部：回転ヘラ切り
2	須恵器・　壺	D区・1号窯灰原確認面	11.2	——	——	外面：ロクロナデ	内面：ロクロ痕	底部：————
3	須恵器・　坏	D区・3号窯　確認面	15.0	6.9	3.6	外面：ロクロナデ	内面：ロクロナデ	底部：回転糸切り
4	須恵器・　坏	D区・3号窯　確認面	15.2	6.5	4.9	外面：ロクロナデ	内面：ロクロナデ	底部：回転糸切り
5	須恵器・　坏	D区・3号窯　確認面	15.1	6.3	3.9	外面：ロクロナデ	内面：ロクロナデ	底部：回転糸切り
6	須恵器・　坏	D区・5号窯　確認面	14.1	5.5	4.3	外面：ロクロナデ	内面：ロクロナデ	底部：回転糸切り

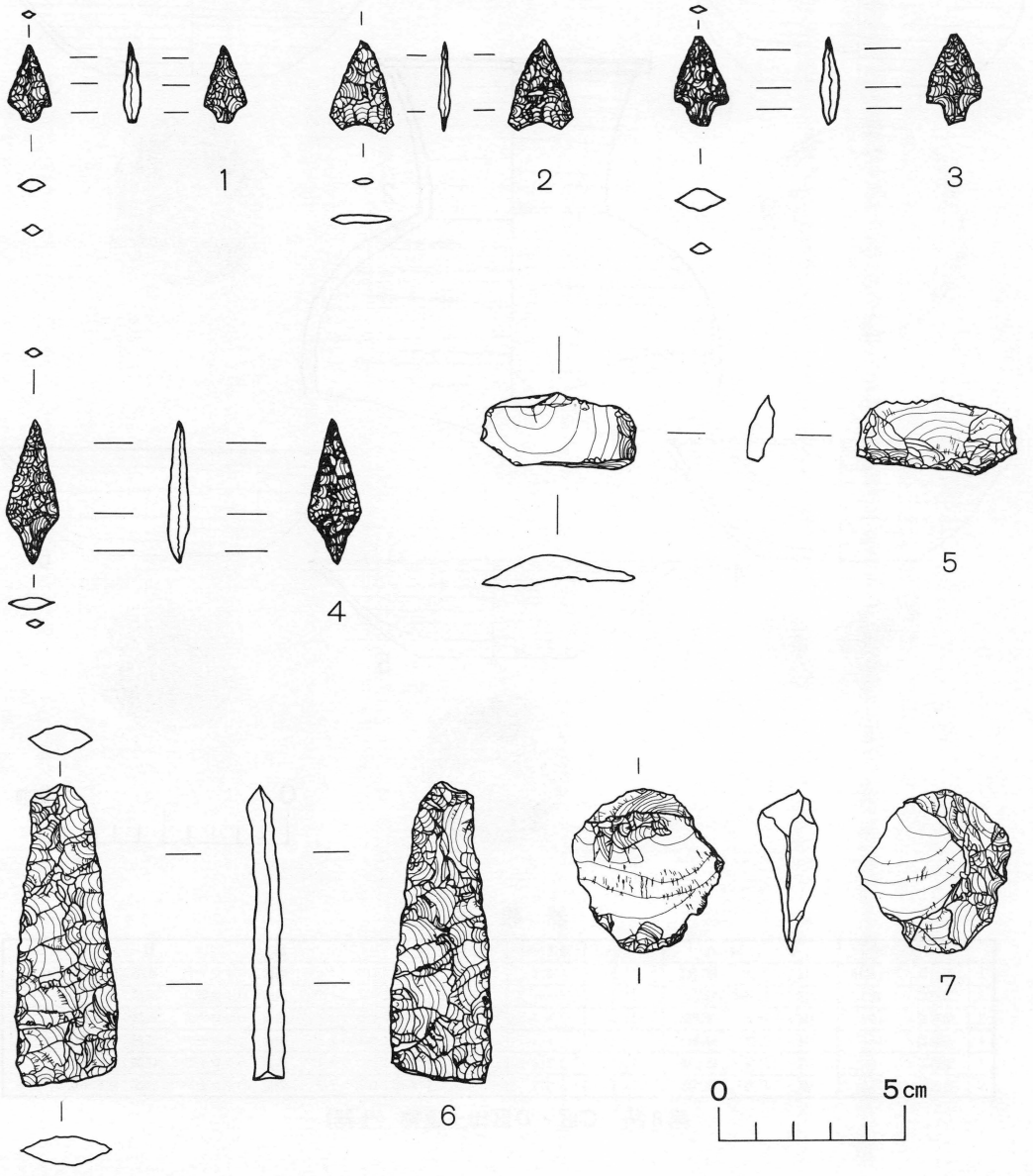
第8図　C区・D区出土遺物（土器）

(2)**第3号焼土遺構**（確認地点　NA－525･6）

平面形は長方形で、長軸119cm、短軸95cm、深さ18cmの規模である。底面はほぼ平坦で、西側の壁面を除いて壁は緩やかに立ち上がる。西側の壁面及び底面の一部が赤褐色に焼けている。堆積土は2層に分けられ、1層からは須恵器片が出土している。

(3)**第6号焼土遺構**（確認地点　NA－556）

平面形は円形で、径95cm、深さ8cmの規模である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。第2号焼土遺構同様に明確な焼け面はみられない。堆積土は2層に分けられ、1層からは須恵器片が出土している。



石 器 観 察 表

	器　種	出 土 地 点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
1	石　鏃	D区・NS−528	24	16	3	0.9
2	石　鏃	C区・PD−550	20.5	12	4	0.6
3	石　鏃	D区・NO−478	24	15	5	1.3
4	石　鏃	D区・NP−509	39	14	5	1.6
5	スクレイパー	D区・NP−511	20	42	7	7.6
6	石　槍	D区・NM−526	81	28	8	20.8
7	スクレイパー	D区・表　採	44	40	16	16.6

第9図　C区・D区出土遺物（石器）

Ⅵ. ま と め

今回の調査で確認されたことを要約すると次のようになる。

(1)B区……遺構は頂部と南側斜面から発見されている。遺物は住居跡とその周辺で土師器・須恵器が出土している。

(2)C区……北区と南区の2ヶ所を調査した結果、遺構は北区で発見され、遺構の種類ごとに分布地点の違いがみられた。遺物は住居跡とその周辺で土師器・須恵器が出土している。昨年度と併せると、北区及びその南側に続く緩斜面に遺構がまとまることが判った。

(3)D区……遺構の多くは北側で発見されている。また、本年度はD区のみで窯跡が発見されている。多くの場合、窯跡は並んで発見されるものであるが、ここでは最も近接した窯でも10m以上離れており、D区を南北に区分する沢に沿って点在する傾向にある。遺物は住居跡・窯跡とその周辺から出土している。

昨年度同様、今回の調査も発掘面積に比べて発見された遺構は少ない。窯跡は昨年の1基を含めて8基となった。このうち第1・第6号窯跡がかろうじて並んでいると言える程度で、多くは点在する傾向にある。また、C区（南区）の南東500mにある関ノ入子供広場の一画や須江山浄水場の南側にも窯跡が1基ずつ確認されているが（石巻高等学校教諭三宅宗議氏の御教示による）、現段階ではその並びの同一標高地点に窯跡は発見されていない。来年度以降の調査で資料を補充し、窯跡が点在する傾向にあるのが本地区の特徴であるのか否かを今後の課題として探ってゆきたい。

引用・参考文献（五十音順）

石川・相沢・石本（1987）：「高崎遺跡」多賀城市文化財調査報告書第12集

伊東信雄（1957）：「古代史」宮城県史第１巻

恵美・菅井（1987）：「愛島東部丘陵遺跡群詳細分布調査Ⅲ」名取市文化財調査報告書第18集

小山・竹原（1987）：「新版標準土色帖」

笠原・茂木（1985）：「石兜遺跡」宮城県文化財調査報告書第106集

河南町文化財保護委員会（1986）：「わがまち河南の文化財」

工藤・菅原（1987）：「柳生」仙台市文化財調査報告書第95集

高橋・阿部（1987）：「須江糠塚遺跡」河南町文化財調査報告書第１集

田中・主浜・佐藤（1984）：「山口遺跡Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第61集

中野（1988）：「須江関ノ入遺跡詳細分布調査」河南町文化財調査報告書第２集

日本貨幣商協同組合（1984）：「日本貨幣型録84年版」

松本彦七郎（1919－ａ）：「陸前国宝ヶ峯遺跡の分層的小発掘成績」人類学雑誌34の５

（1919－ｂ）：「宝ヶ峯遺跡について」考古学雑誌第９巻第９号

宮城県教育委員会（1988）：「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第125集

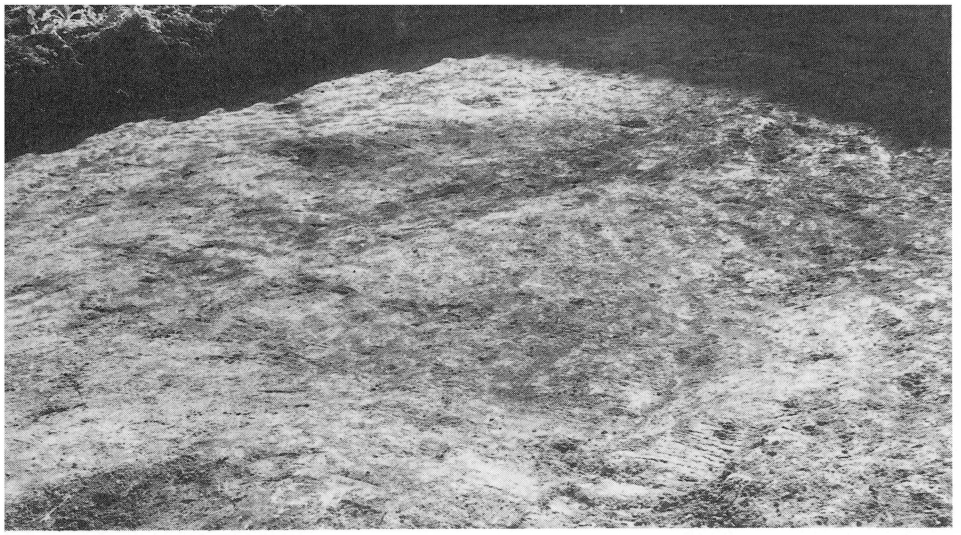
三宅・進藤・茂木（1987）：「赤井遺跡」矢本町文化財調査報告書第１集

写　真　図　版

①B区
調査前全景

②C区
調査前全景

③D区　3号窯跡
・灰原確認面

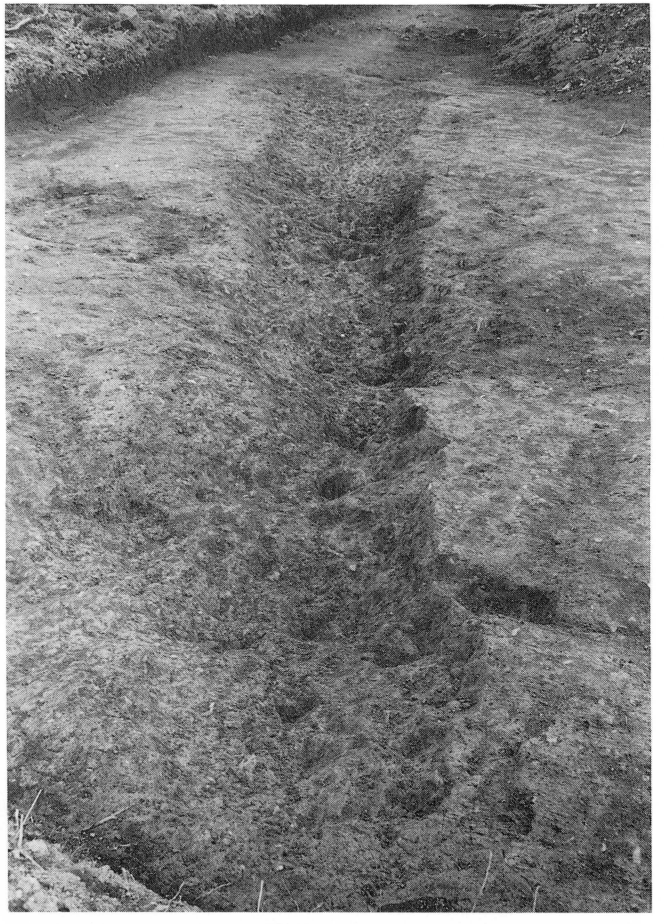


④Ｂ区　１号住居跡確認面

⑥Ｂ区　６号焼土遺構検出状況

⑤Ｂ区　ＳＫ－１検出状況

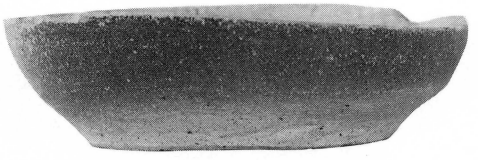
⑦Ｂ区　７号焼土遺構検出状況



⑧D区　2号焼土遺構検出状況

⑨D区　3号焼土遺構
検出状況

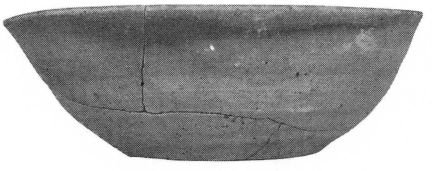
⑩D区　6号焼土遺構
検出状況



1

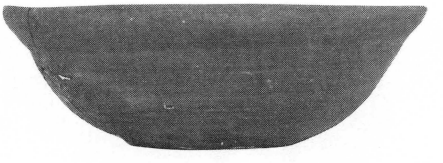
2

3



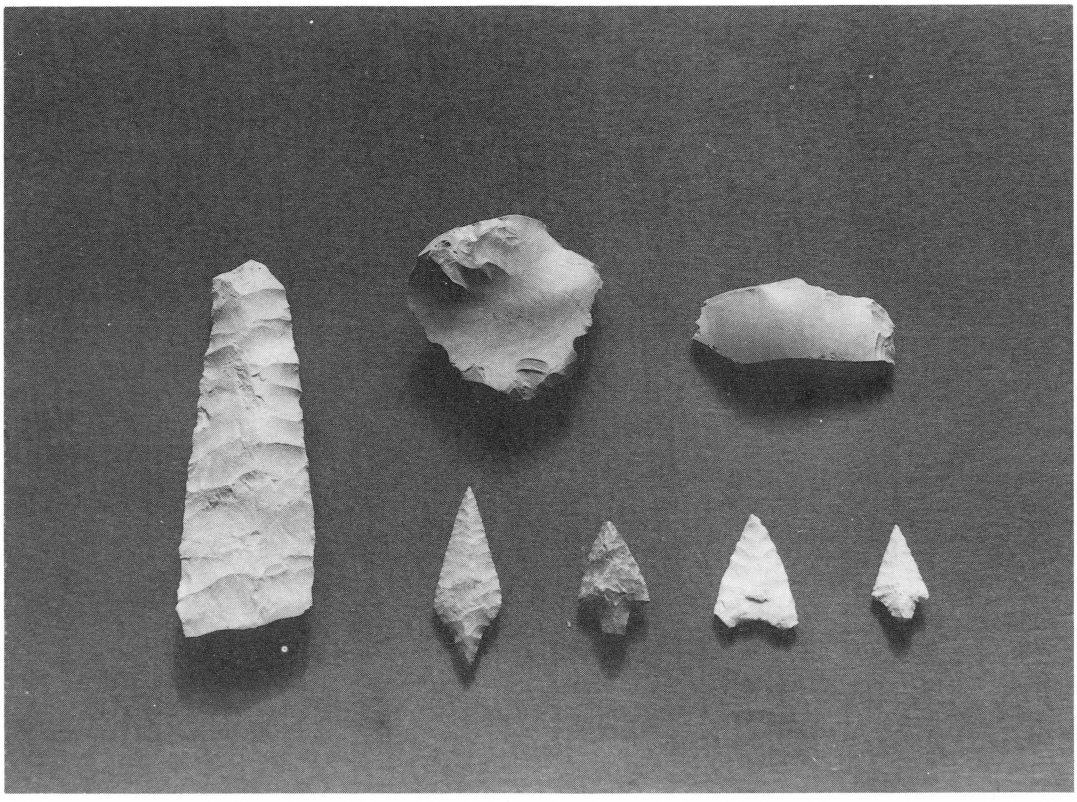
4

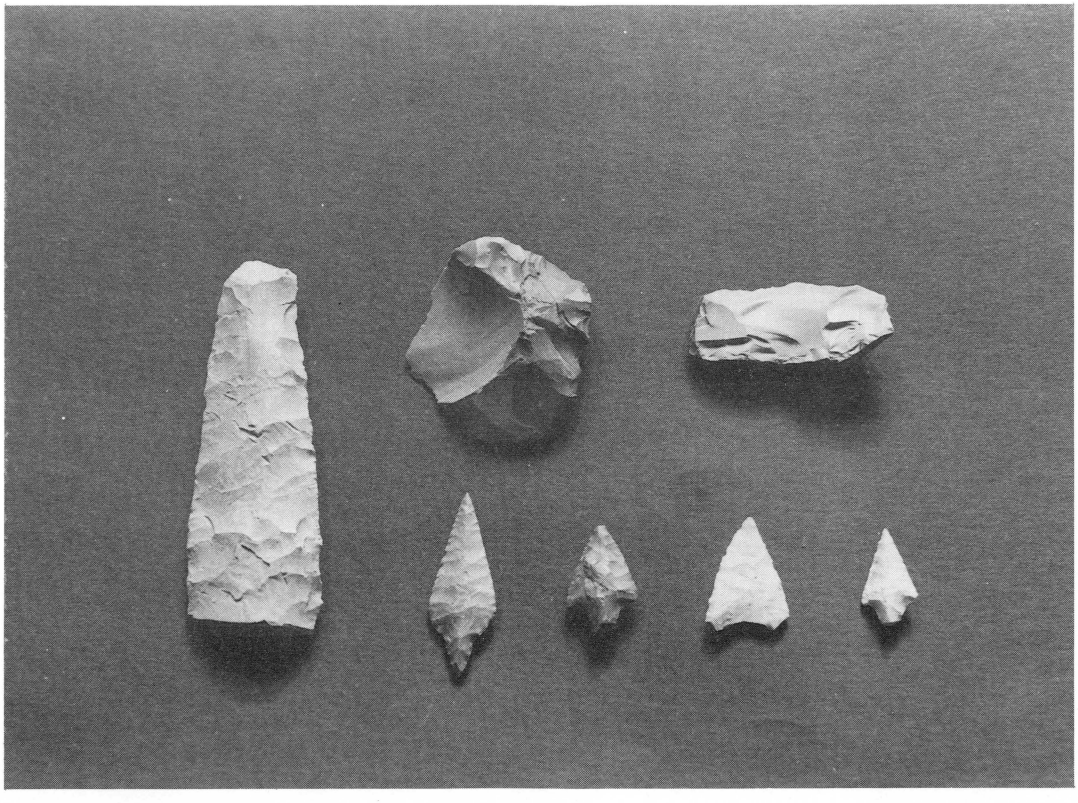
5



6

⑪C区・D区出土遺物（土器）





⑫C区・D区出土遺物（石器）

職　員　録

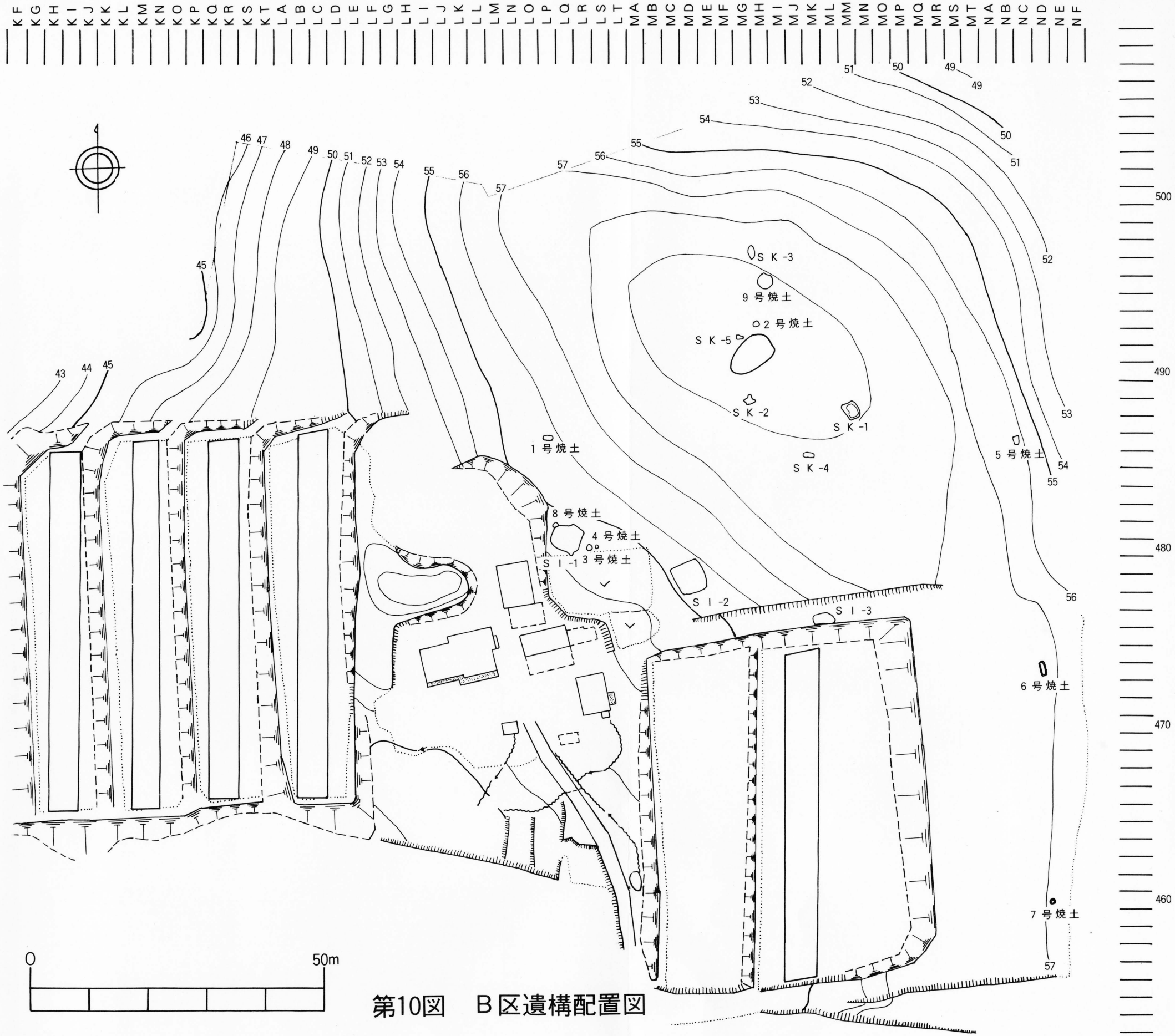
社会教育課

課長	高松　律
課長補佐	浅野　千代子
係長	阿部　光男
主事	中野　裕平
社会教育指導員	斎藤　宏子

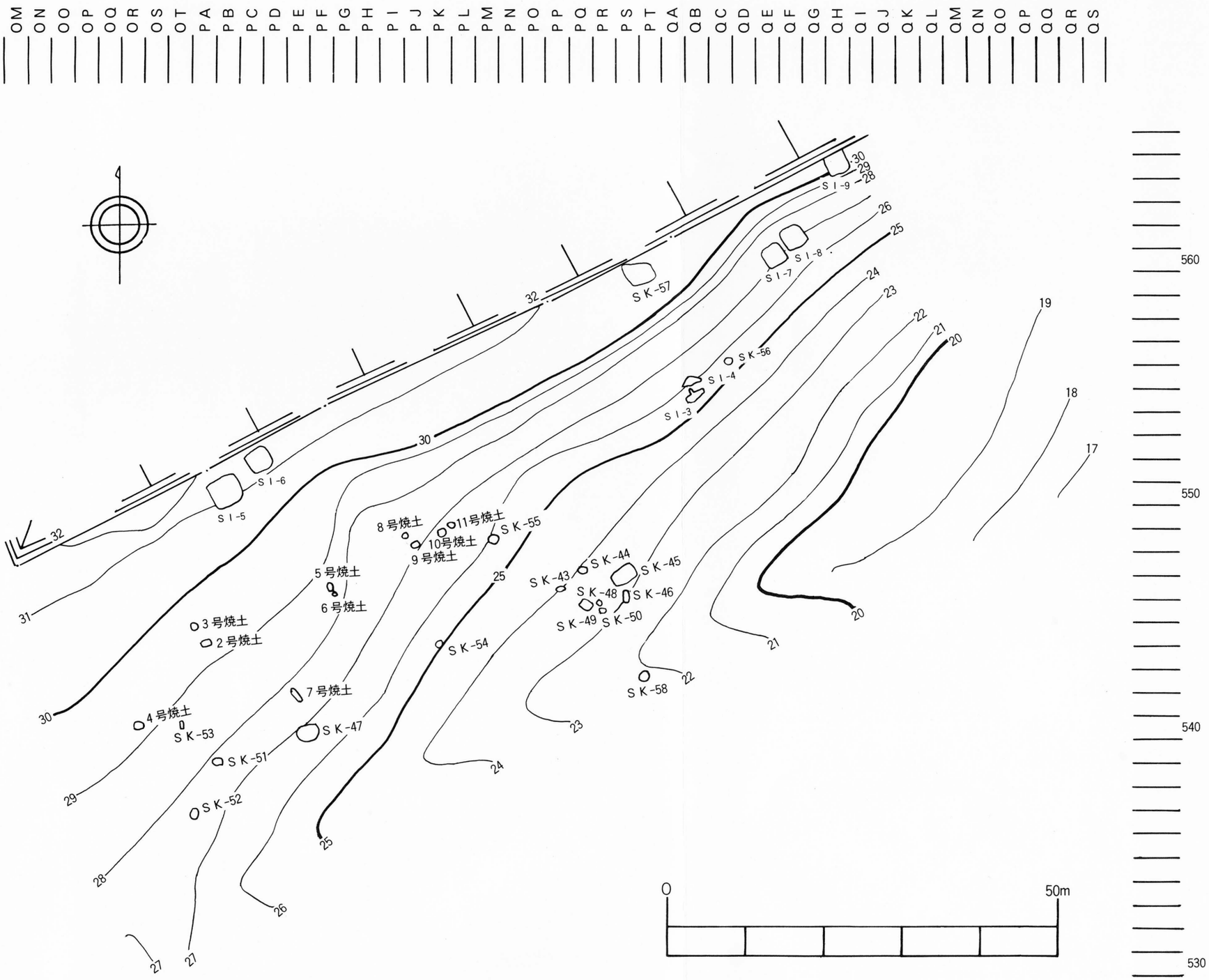
河南町文化財調査報告書刊行目録

第１集　須江糠塚遺跡（昭和62年３月）

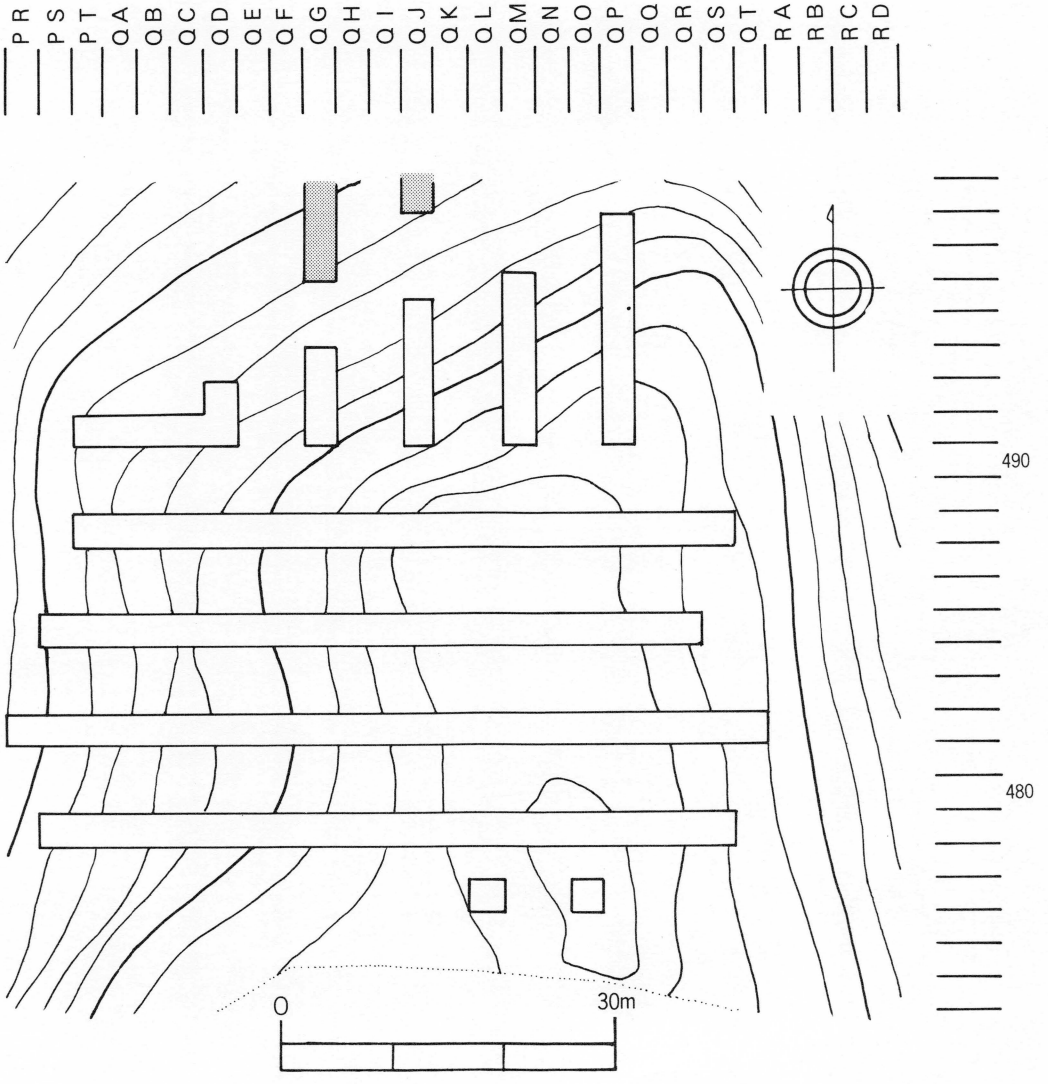
第２集　須江関ノ入遺跡詳細分布調査（昭和63年３月）



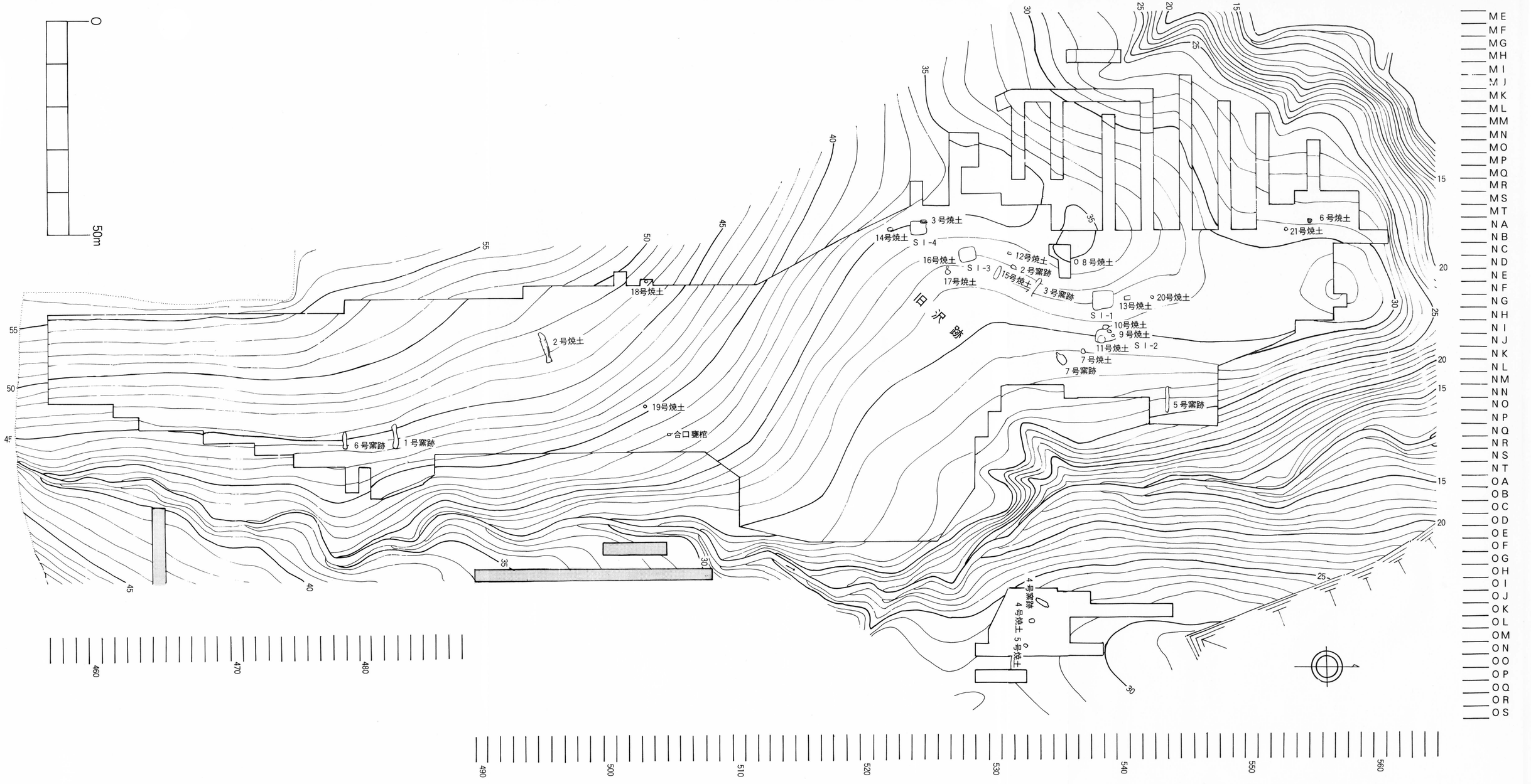
第10図　B区遺構配置図



第11図　C区(北区)遺構配置図



第12図　C区(南区)トレンチ図



第13図　D区遺構配置図

河南町文化財調査報告書第３集

須江関ノ入遺跡詳細分布調査Ⅱ

平成元年３月３１日発行

発　行　河　南　町　教　育　委　員　会

宮城県桃生郡河南町前谷地字黒沢前7

印　刷　千　葉　印　刷　所